

# プラトン『饗宴』の考察

## ——ガリソンのデューイ主義を手引きに——

下 蘭 勇 磨

### 〈目次〉

#### はじめに

1. 各エロース神話の紹介
2. ディオティーマのエロース神話およびイデア論
3. プラトニズム的イデア論へのデューイ主義的批判

おわりに——静的調和から動的調和へ

#### はじめに

本稿の目的は、ガリソン (Jim Garrison)<sup>1</sup>の著作『デューイとエロース』の第一章「プラトンの『饗宴』——エロース、美、善」を手引きに、プラトン (BC427-347) 中期の対話編『饗宴』をデューイ主義的に考察し、プラトン哲学の再構築を試論として展開することにある。本稿において、筆者（下蘭）はプラトン哲学とプラトニズムを区別する。前者の用語を「プラトンの著作に宿る普遍的な価値」として、後者の用語を「プラトン哲学の一般的な（通俗的な、伝統的な、教科書的な）解釈」として用いるのだが、後者には現代において不利益となる思想が混じっていると考えている。つまり本稿の目指すところは、プラトニズムをデューイ主義的に批判することでプラトン哲学を現

代に蘇生させる、ということになる<sup>2</sup>。

ガリソンは、プラトニズムに現場蔑視の官僚主義や現実離れした超自然主義を見る。そこでは実践と理性が完全に分断されており、超越的となった理性がそのスタティックな理論で生命のダイナミズムを束縛している。そうしたプラトニズムの悪しき側面は二千年の年月を経てもなお現代社会の根底に息づいていて、とくに教育現場においてそれが顕著である、と彼は主張する。そこで彼は、自らのデューイ主義的立場から『饗宴』を批判的に考察し、プラトン哲学に宿るダイナミズムを蘇らそうとするのである。そのための手がかりとして、彼は古代ギリシャのエロース教育に注目する。

私は、エロース教育に関する古代の議論を蘇らせたい。エロースは善を欲する。現代という時代は、情熱や美、善について熱く語る能力をほとんど失ってしまった。官僚的になった世界は新たな特効薬を求めてやけになり、技術主義的に監視された学校に例外は許されない。ギリシャの哲人プラトンがエロースの教育について論じたとき、数多くの不思議な物事のなかでも、とくに預言や詩作、そしてダイモーン（運命を司る守護神）について語った。だがあいにく彼はそれらを哲人王の理念と関連付け、選ばれた者だけの能力とみなしてしまった。そこで私は、この注目すべき教育論の方法を修正し、補強し、現代の民主主義社会に役立てたいと思うのである。（*Dewey and Eros*, p.xiii, 傍点は原文。以下同様）

エロース (erōs) は「価値とみなしたものを求めるはたらき」と言える。「あれが好き、これが欲しい」とか「綺麗なあの人と話してみたい」とか「このことをもっと良く知りたい」とか「こういうふうになりたい」とか、全てエロースである。エロースを如何にして教育していくか。エロースが真に求めている善とは何か。こうした議題を扱ったのが古代ギリシャのエロース教育論であり、その成果として現れたのがプロネーシス (phrōnesis, ママ) と呼ばれる実践知 (practical wisdom) である。プロネーシスなる知恵のなかでは情熱と経

験と論理とが分断なく内包されていた、とガリソンは見る。ただ、このプロネーシス研究を現代に蘇らせるためには、そこで用いられていた預言や詩作やダイモンといった神秘的な用語を現代的に焼き直さなければならない。その作業を担うのがデューイ哲学である。デューイの説く実践知は古代のプロネーシスに内在していた知恵を正当に継承している、とガリソンは言う。

デューイにとって、実践知は煩悩 (love) と論理という横糸どうしを編みこむ縦糸であり、共感や創造的イマジネーション、カテゴリーなどを知覚するのに不可欠なものである。それだけではない。実践知によって、生きた経験の倫理的、美学的、認識論的な糸と一緒に縫い合わされ、生そのものという編み物が、その切れ端でなく全体が我々に見えてくるだろう。古代ギリシャ人同様、デューイは実践知と煩悩と論理とを繋ぐ密接な関係を捉えた。現代はこの編み物をどこかに失くしてしまったのであり、だからこそ我々はいま再びこのタペストリーを編みこまなければならないのである。(Dewey and Eros, p.xx)

伝統的に、煩悩と論理とは敵対関係として捉えられてきたといえる。西欧においても東洋においても、煩悩と論理とを分断する伝統があり、前者は基本的に悪とされ、煩悩の理性主義的な拘束こそ教育の目的とされ、最終的には、煩悩を解脱したところに理想的な人格が実現すると見られてきた面がある。プラトニズムはその典型といえよう。

煩悩それ自体は決して忌むべきものではない。理性とともに人格の重要な側面であり、煩悩と理性との相互作用(内的対話)こそが人格成長のダイナミズムを構成する。そして、そうした成長する人格どうしが価値創造のために交流し合うコミュニケーションの現場そのものの内にこそ、プロセスとしての実践知が生きてはたらいっている。それは「生命の饗宴的活動」と言えるかもしれない<sup>3</sup>。これがデューイおよびガリソンから導かれる本稿の主張である。

煩惱それ自体は悪魔ではない。煩惱の正体はエロースであり、彼（彼女）は教育如何でプロネーシスへと成長しうる子供である。エロースをプラトニズムの呪縛から解放するため、本稿は『饗宴』の再構築を試みようとする。

## 1. 各エロース神話の紹介

精神のはたらきについて議論するとき、現代が心理学や脳科学の用語によって説明するのに対し、古代ギリシャ人は神話によって物語ったといえる。プラトンの『饗宴』は、悲劇作家アガトンの家に集まった友人たちが飲み食いを楽しみつつそれぞれのエロース神話を順番に物語っていく、という形で展開されている。『饗宴』には「エロースについて」という副題が後世によって付けられている。

本稿に直接関係があるのは、最後にソクラテスが語るディオティーマという異国女性から聞いたエロース神話であるが、他の人物のエロース論と対比することが彼女のオリジナリティーをより顕著にするように思われるので、ディオティーマ以外のエロース論も筆者なりに要旨をまとめて足早に見ていくことにする。

まず口火を切るのは、弁論術の大好きなパイドロスである。彼は昔の詩人たちの言葉を引用して、エロースは最も古い神々の一人だと話し出し、最も古い神ということは最も善いものの源となる存在のはずだと主張する。また、神話では数々の勇ましい英雄たちが魅力的に描かれていて、彼らが勇猛果敢に闘うのは愛する人のためであり、したがって彼らに勇気を吹き込んだのはみなエロースだと語る。どんな神話でも、愛のために頑張り、勇気を出し、命をも惜しまず、一生懸命に苦難に立ち向かう者は、みな最終的に神々に祝福されている。「誰かを愛してる人ってのは、愛のインスピレーションが美德になってさ、彼の愛している人以上に神様たちに接近しているんだ」(Symposium, 180b)。以上がパイドロスの論旨である。

今度はパウサニアスが「パイドロス君、僕らの議論が上手くいってると思

えないよ。仮にエロースを讃嘆することだけが僕らの目的だとしてもね」(*Symposium*, 180c) と話し始める。彼によると、美の女神アプロディーテは二人姉妹であり、それに準じて彼女に仕えるエロースにも二種類ある。姉のアプロディーテは天上から生まれた高貴な女神で、彼女に属するエロースは精神的で永続的なものを求める。一方、妹のアプロディーテは低俗な血を持ち、彼女に属するエロースも彼女同様はしたなく、行き当たりばったりのでたらしめな行動をとる。彼(ないし彼を帯びた人間)は、人の精神よりも人の肉体に恋し、しかもできるだけ愚かな人を恋の対象とする。だから長続きしない。したがって我々は、天上の女神に仕える前者のエロースのみを讃嘆すべきだ。なぜなら彼の方だけが普遍的な徳を目指し、社会にとっても個人にとっても価値的なんだから。パウサニアスはこう締めくくる。

次に医者のエリュクシマコスが「ええっと、みなさん。(中略) エロースには二種類あるとしたパウサニアスさんの分析に私も賛成です。ただ医学の見地からするとエロースとは、だれかを愛するという形で人間の魂だけにはたらきかけるのではなく、他の色んな事象、動物の行動や植物の成長にも彼の力のはたらいており、私が医学から学んだことというのは、エロースの力はこんなにも素晴らしく不思議で、あらゆる存在、神聖なものだろうと汚らしいものだろうと、あらゆる活動を包含している、ということなんです」(*Symposium*, 186) と語る。そして、先の「天上のエロース」と「低俗なエロース」のそれぞれを「健康的な部分に働くエロース」と「病的な部分に働くエロース」とに言い換え、前者は節制によって調和をもたらし、後者は放縦によって混乱をもたらすとする。前者を具現しているもの、それは医術はもちろん、体操術や農耕術、音楽などもそうである。例えば、天文学は季節と暮らしを調和させて豊作をもたらし、特に生贄や祈祷を伴う儀式の数々というのは、それらは神々と人間との交流手段であるが、まさにエロースそのものの回復ないし健康維持のために執り行われるのである。「したがってみなさん。エロースの力は様々であり、いや、それは全てを包含していますが、彼の偉大な力が最大限に発揮されるとき、天上と地上とが善に向かって節制的関係に

結ばれ、あらゆる喜びが我々に降ってきては、社会的な福祉、恒久の歓喜、人類の友和を実現させます」(*Symposium*, 188d) と謳い上げ、喜劇作家アリストパネスに話を渡す。

アリストパネスは笑いながら「僕は、君やパウサニ阿斯とはぜんぜん違う路線で話してみようかな」(*Symposium*, 189c) と始める。彼の神話によると、昔の人間は球体をしており、手足は四本ずつ、顔は頭の両側に二つ、耳は四つ……、というような恰好をしていて、体を車輪のように回転させながら縦横無尽に移動することができた。彼らの精神も体同様に円満で充足的で、その心身の強さは神々に匹敵するほどだったため、彼らはしだいに神々に刃向うようになっていった。神々はどうしたものかと互いに相談し合ったあげく、人間一人一人をそれぞれ真ん中で真っ二つにすることにした。それらが現存する僕ら、手足二本ずつ顔一つで直立歩行する人間の祖先である。そうしたことにより、今日の人間はもとの姿になるべく自分の半身を求めて交わるのである。そのとき僕らにはたらきかけるもの、それがエロースであり、「彼は僕らがかつての本性に回復させようと常に試みていて、二人を一人にしようと、あの人とこの人との溝に橋を架けようと頑張ってるんだ」(*Symposium*, 191d)。だから彼に逆らっちゃいけない。彼と「友好関係を結んで友達になればさ、きっと幸せになれるんだけど、あいにく、自分の半身に巡り合わせてもらえる人なんてほとんどいないんだよね」(*Symposium*, 193b) と話し終わる。

いよいよ、この饗宴の主催者アガトンが口を開く。彼は言う。「いままで話された方々は、誰一人としてエロース神それ自身の本性を讃えられておられません。ただただ彼から与えられる数々の恵みや幸について讃嘆されているだけのようです。誰かを讃嘆するうえで、正しい手順というのは、まず彼の本性について明らかにしたあと、それから彼のもたらす恵みについて謳わなければなりません。さあ、みなさん。まずエロース神自身を賛美し、それから彼の与えてくれるものを祝おうじゃありませんか。これが我々の使命です」(*Symposium*, 194d-195) と論を開始する。まず、エロースは神々のなかで最も美しい。ゆえに最も高貴であり、最も幸福であり、最も若く、永遠に若く、

それでいて他の神々から妬まれることもない。なぜなら、低俗、不幸、老齡、嫉妬というのは全て醜いものであり、最も美しいエロースは醜いものから最も遠くにいるからである。彼の華奢な足取りは、ごつごつとした地面など似つかわしく、もっぱら柔和な詩人たちの空想のなかを散歩し、歩き疲れたら咲きたての花の香りにしばし憩い休んでいる。もちろん暴力など彼には無縁で、すべてのものを穏和に打ち負かしてしまう。勇者たちを勇気づけるのが愛なのだから、エロースは勇者の中の勇者ということになる。詩人や芸術家を創作に駆り立てるのもエロースなら、生きとし生けるものが繁殖し成長するのもエロースの振る舞いであり、武術、医術、占星術、鍛冶術、機織りなどのあらゆる技術がエロースに導かれての恵みなのは言うまでもない。「この神がもたらすもの。それは大地の平和。そこでは時間さえもゆっくり流れ、何もかもが穏やかで、どんなに激しい苦悩もすやすや寝入ってしまいます。風が止んで花の香りがし始めると、体中の血が静かになり、我々は眠りへ誘われます。エロースからの恵みはこのようなふうでして、彼は争い事を追放し、友愛を招き入れ、今みたいな交流の場を設けてくれます。歌やダンス、祭りや祝典が盛り上がるのも彼から躍動する精神のおかげですし、そこでは野蛮が取り払われ、文化は花開き、親切が溢れ、悪意は減少します。彼は愛くるしくも優雅です。賢者からすれば彼はどこまでも不思議な存在であり、他の神々からは永遠に憧れの的です。その姿というもの、心の貧しい人には絶望を、豊かな者には幸福を感じさせます。彼はあらゆる繊細なもの、可愛らしいもの、上品なもの、優雅なものの源であり、(中略)我々の誰もが従わなければならない神々のうちで、最も高貴で愛すべき存在なのです。我々のこの天上歌が、この世もあの世も包み込み、調和の大合唱となって彼を讃えんことを」(Symposium, 197c-e)とアガトンが謳い終わったとき、割れんばかりの喝采が上がる。

## 2. ディオティーマのエロス神話およびイデア論

喝采が鳴り止んだあと、ソクラテスが困った表情で「こんな美しい話の後に、この僕もエロスを賛美するなんて。逃げ出したいくらいだよ。どっか逃げ道とかなないかなあ」などと話し始め、アガトンのエロス論を聞いていて気付いたことを発表する。「自分も含めて、僕はこっ恥ずかしくなったんだ。どうやら僕らは、エロスを賞賛することだけに夢中になって、それが真実かどうかなんてどうでもよくなってしまってたようだよ」(*Symposium*, 198-199, 趣旨)。ガリソンも「アガトンはただ美しい即興詩を聞いてもらいたかっただけであり、真実や善について誠実に熟考しようと努力したのではない」(*Dewey and Eros*, p.3) と評している。「だから僕は、もう美辞麗句で飾り立てるなんてしたくないんだ。真実だけ追いきるってことならやってみるけど」と言うソクラテスに、友人たちはその追求を懇願する。

ソクラテスは、アガトンを対話の相手に選び、ロゴスに導かれて次のような論理を展開する。エロスは何かを求めている。つまり、エロスは何かに対するエロスである。エロスの求めているもの、それは美と呼ばれるところのものである。ところで、何かを求めている者は、それが自分に欠けているから求めている。従って、エロスには美が欠けているということになる。つまり、エロスは美しくない。

こうして、アガトンとは真逆の結論を出したソクラテスは、「実はさ、こういう話を僕はある女性から教わったんだ。彼女はマンティネイアに暮らすディオティーマという女性でね」と打ち明け、そこから議論はソクラテスと彼女との間で交わされた対話へと移される。ガリソンは「彼女の名前に注目すると(それは「神に愛し育てられた」を意味する)、彼女は預言者であった」(*Dewey and Eros*, p.3) と紹介している。

エロスについてディオティーマと話すソクラテスも、実はアガトンとおおよそ同じような内容を主張した。つまり、エロスは偉大な神であり、美しいものに向かうものである、と。そのとき、ディオティーマは次のように



教えてくれたと言う。筆者なりにまとめてみる。

エロースは美しいものを求める、というあなたの意見からすれば、エロースは美しくもないし善きものでもない。それは必然でしょう。かといってエロースを醜く詰まらないものだと思いつけるのはあなたの早合点です。あなたには中間というものが考えられてません。例えば直観なんていうのは、正しいことを思ってるのに説明はできないのですから知と無知の中間ですね。そういうふうにエロースも美と醜の中間にいるのですよ。同様に、エロースは幸福と不幸の中間、神々と人間との中間にいる。それは一人の強力なダイモーンですよ。さて、ダイモーンとは何者か。彼らは人間からの供え物や祈りを神々へと届け、神々からの言葉を人間に伝達するというふうに、両者の隙間を満たしています。彼らは両者の領域を溶接させ、一つの偉大な全体性へと合流させる存在です。占いやお祓いや祈祷などのあらゆる妖術が可能なのもダイモーンによるのです。目覚めているときにしろ眠っているときにしろ、人間が神々と対話するときにはすべてダイモーンを通じて行われます。こうしたダイモーン的な能力で何かを創造する人たちがいる反面、そうではなく、ただ機械的な能力のみ持つ人たちは世俗的な人間です。ダイモーンは数も多く、ありとあらゆる種類のがいて、エロースもまたその一員なのです。

(*Symposium*, 201e-203, 趣旨)

ディオティーマは中間 (medium) という概念を提示する。それは、Aでもなく非Aでもなく、その間に成立するとされ、矛盾律や排中律を根本原理とする機械的思考とは相容れない概念である。それは二者択一的な定義を拒否する。ところでガリソンは、こうした中間的性質をもつ存在として学校の子供たちを挙げる。例えば、「トニー君は優秀かそうでないかのどちらかである」といった二者択一的規則で彼そのものを定義することはできない。彼への評価というのは、どういう基準で判断するかにもよるし、いつ判断するかにも

よる。彼の性質は常に変化しているのであり、日ごとに成長したり後退したりする。日によって能力は違うだろうし、午前と午後でも違うし、誰といいかでも、今どういう気分かでも違うだろう。彼は、一週間前にできなかったことを昨日できるようになったのだが、今日はまたできなくなったりする。彼の性質は留まるということがなく、常に何らかの対立概念の中間で揺れ動いている。こうした成長や衰退、生成、発展といったダイナミズムを本質としている存在、それらは全て中間的性質をもっているといえる。それらはスタティックな定義を拒絶する。「寒い」のでも「暑い」のでもなくその中間的移行が「季節の変化」であり、「短い」のでも「長い」のでもなくその中間的移行が「枝が伸びる」ということであり、「無知」でも「知」でもなくその中間的移行が「考える（学習する、探求する）」ということである、というふうに。

ディオティーマの話にたじたじのソクラテスは、彼女に「それにしても、そんなエロースの父親とか母親って、いったい誰なんでしょう」と尋ねる。ここからエロース出生の秘密が預言者ディオティーマによって物語られる。

彼女は言う。エロースは「豊かさと技能の神」ポロスと「貧困と欠乏の神」ペニアとの息子である。美の女神アプロディーテが誕生したとき、オリュポスの神々は祝宴を開いたのだが、神酒ネクタールを飲みすぎたポロスは酔っぱらってしまい、ゼウス神の庭で眠りに落ちる。そこへ、貧乏の性格を打ち払うべくペニアが忍び込み、まんまとポロスの隣で横になり、お腹にエロースを宿すこととなった、と。

そしてこう結論付ける。

エロースはアプロディーテ生誕の祝宴のさなかで生を受けたのですから、生来、美しいものを恋する者ですけど、欠乏の神ペニアの息子ですから、彼自身はいつも貧しい運命にあり、人がふつう考えるような華奢で美しい存在ではないのです。それどころかごつごつした体つきで、うす汚く、裸足で流浪し、いつも夜具なしで大地にごろ寝して、星空の下、

戸口や道端で横になるという、母親の血をひいて常に欠乏の運命にある者です。と同時に、父親の血も引き継いでいますから、美と善の追求を怠らず、エネルギーで雄々しくて、懸命に努力する知の狩人、魔術師、探求者です。本性としては、不死でもなく死すべき者でもなく、命の花を咲かせたと思えば儚く死んでゆき、かと思えば父親の血によって再び蘇生する者です。彼が手に入れたものは同時にこぼれ落ち、彼は決して困窮しない代わりにまた裕福になることもないのであって、常に知と無知の中間に位置する存在なのです。(Symposium, 203c-204, 趣旨)

エロースは欠乏と円満との中間者である、とディオティーマは語る。ちなみに、彼女以前のエロース論者たちには中間という概念がなかった。彼らにとってエロースは高貴か低俗かのどちらかであり、パイドロスとアリストパネスとアガトンは高貴な存在として讃嘆し、パウサニアスとエリュクシマコスが高貴な存在と低俗な存在との二種類があるとして分析した。対してディオティーマのエロース論では、高貴と低俗との間を絶えず行き来する存在として、中間として捉えどころのない、しかし生き生きとした存在としてエロースが理解されている。またディオティーマは、アガトンに代表されるようなエロース讃嘆に対して「そういう考えも驚くことじゃありません。エロースそのものを語ったのではなく、エロースが恋する美の方を讃嘆したのだと考えれば」(Symposium, 204c)と言う。

アガトンの語るエロース。それは確かに「美しい」かもしれない。しかしどこかしら「魅力」に欠ける面があるように筆者には思われる。対してディオティーマのエロースは、確かに「美しく」はないかもしれない。でもそこには、「美と醜が動的に調和した魅力」が感じられる。いはばそこには、「神的な美」と区別された「人間的な美」(人間味としての美しさ)がある。こうした美の区別を踏まえたとき、プラトニズムとデューイ主義との対照が浮かび上がってくる。すなわち、プラトニズムは神的な美を求めて上昇し、デューイ主義は人間的な美を増幅させようと邁進する、といえるのである。デュー

イ主義は、「神的な美」よりも「神的な美へ向かおうとするもの」の方にこそ美しさを見出す。それは、前節でパイドロスが「誰かを愛してる人ってのは、愛のインスピレーションが美德になってさ、彼の愛している人以上に神様たちに接近しているんだ」(*Symposium*, 180b)と言っていたことに共鳴している。本稿ではこの「人間的な美」を後で考察し、それを「動的調和」へと展開していく。

話をディオティーマに戻そう。「ではソクラテスさん。エロースの活動とはいったい何なのでしょうか」と尋ねるディオティーマに、ソクラテスは「それが分かるくらいなら、こうやって貴女のところへ来やしませんよ」と言う。それを受けてディオティーマは「エロースというのは、肉体と精神との両領域において、美しいものに創出 (bring forth) する活動なんです」(*Symposium*, 206b)と暴露する。ソクラテスが「あまりにも深淵で、僕の頭ではどうも理解できません」と嘆くのでディオティーマは次のような説明を付け加える。

ソクラテスさん、人間というのはだれもが肉体的にも精神的にも身籠っているのです。そして適切な時期がくると、我々の本性が産むこと (procreation) を欲します。しかし醜いもののうちに産むことは適わないので、我々は美しいものを追い求めるといわけです。男女の交わりがその典型ですね。そうした妊娠や出産というのは、神秘的なはたらきであって、つまりは、死すべきもののうちに不死なるものが内在していることによるのです。ただ、こうしたエロースのはたらきというのは不調和なものななかでは起こりえません。醜いものは不調和なものであり、したがって神的なものとも不調和ですから、妊娠や出産に適さないといわけです。身籠っている者が美しいものに近づくと、心がなごみ、気分が高まり、心身ともに生き生きとして出産に至ります。ところが醜いものに直面すると、顔が憂鬱になり、悲しみで身を縮め、内に閉じこもったまま出産できず苦しむのです。だからソクラテスさん、あなたが考えるように、エロースはただ美しいものを求めているだけではないのです

よ。そうじゃなくて、美しいもののうちに妊娠 (conception 着想) したり出産 (generation 繁栄) したりすることを求めているのです。(Symposium, 206c-e, 趣旨)

エロースが美しいものを求めるのは、その調和を契機として何かを創出するためである。エロースは個物どうしに美的関係 (= 調和) を模索し、関係が成立したとなると、両者の結合から何かを生み出す。その力というもの、あるときは対立物ですら結合させる。エロースそれ自身が、円満と欠乏という相反する者どうしの結合によって誕生したように。彼の誕生は、美の女神アプロディーテ誕生の祝宴のさなかで、ポロスの陶醉とペニアの知恵が契機だった。

ディオティーマはエロース的活動の具体例として、子供の妊娠出産の他に、ポイエーシス (poiēsis 詩作、制作) を取り上げている。

ポイエーシスという言葉の本当の意味において、それは一種類ではありませんね。それはいわば、依然そこには存在していなかった何かを実在へと呼び出すことです。だから、あらゆる作品創造 (artistic creation) が詩作であり、すべての制作者が詩人なのです。にもかかわらず、我々は詩作のごく一部分、音律や韻律に関する創造のみを詩作の全体だと思いついてしまっているのです。(Symposium, 205b-c)

こうして、ディオティーマは出産も詩作もどちらも創造 (creation) として同一視する。両者は、肉体的と精神的の違いはあれど、どちらもエロースに起因し、「何かを実在へと呼び出すこと」としてポイエーシスに変わりはない、というのである。

ガリソンは、こうしたディオティーマのポイエーシス解釈とデューイの自然主義 (naturalism) との親近性を指摘する。

ラテン語の自然 (*natura*) は、もともと農業や繁殖に関する言葉を起源としている。それは「産まれる」(be born) や「生ずる」(spring up) という意味の *nasci* に由来する。さて、オックスフォード英語辞典の簡易版 (1971) に載ってる *nascent* の第二義と、ディオティーマのポイエーシスの定義「何かを実在へと呼び出すこと」とを較べてみることに意義がある。その辞書にはこう書いてある。「実在へと生起させつつある状態や行為。まさに存在が始まろうとしているところ。形成や成長、発展などが開始すること」。ラテン語の *natura* はギリシャ語の *πύσις* (*physis* 自然) の翻訳として用いられたが、このギリシャ語は「前へ連れて来る」(bring-forth 創出, 出産) や「前へ出す」(put forth 発芽, 出航) や「成長させる」(make grow) を意味する *phyo* に由来する。(中略) デューイにとって、人間本性 (human nature) も含めた自然全てが出来事 (event) であり、実践知の目標というのは、我々が欲している価値 (the goods) が創出 (bring-forth) されるよう自然を耕すことにある。(Dewey and Eros, p.21)

語源的に見て、自然というのはディオティーマが説くポイエーシスのな力を本来的に内在させている。また、*πύσις* としての自然は、物体 (object) や事物 (thing) などではなく、出来事ないしは経過 (coming-to-pass) を意味している。自然は常に何かを創造させんとポイエーシスのな状態で生きてはたらいっているのである。以上を踏まえると、デューイの説く実践知というのは、ポイエーシスの自然力の最たるものとして考えられる。それは、*nascent* な動的自然を耕作 (cultivate) することによって文化 (culture) 的価値を創出するポイエーシスであり、この実践知の最も重要な活動の一つが教育であって、例えば幼稚園 (kindergarten) というのはまさしく子供 (kinder) の園 (garten) なのだ、とガリソンは力説する。

こうしたデューイおよびガリソンの自然洞察は、先に見たエリュクシマコス「動物の行動や植物の成長にもエロースの力ははたらいており、私が医学から学んだことというのは、エロースの力はこんなにも素晴らしく不思議

で、あらゆる存在、神聖なものだろうと汚らしいものだろうと、あらゆる活動を包含している、ということなんです」という言葉に繋がる。エロースの力(=ポイエーシスの力)というのは現実離れした神秘などではない。神秘というなら人間を含む自然そのものがそのまま神秘的であって、つまり、この世界のあらゆる活動がエロースのポイエーシスとして見られるのである。人間的な営みはもちろん、体の新陳代謝、自然現象、動植物の活動、力学的運動ですら物体と物理条件とのポイエーシスとして見るができる<sup>4</sup>。

さて、エロースは美を求める中間者であり、彼の目的は美のうちに何かを創出すること(=ポイエーシス)にある、ということになった。ところで、エロースがこうした活動へと駆り立てられるのはどうしてなのか。この問いにディオティーマは「不死不滅への憧れ」だと答え、その憧れの最終的な極地で、すなわち不死不滅への道の最終地点で、エロース(的人間)は「美のアイデア」へ到達するとされる。これまでの言説にさえ半ば混乱気味だったソクラテス。彼を叱咤激励しつつ、ディオティーマはいよいよ彼女のアイデア論<sup>5</sup>を展開していくのである。

彼女は物凄い確信でおおよそ次のようなことを語る。動物がエロースに導かれて生殖し、子を産み育てるのはなぜか。ときに自らが犠牲になることも顧みずに。彼らは子孫を残すことによって命を繋いでいるのである。つまり有限なる生命のうちに不死なる生命を具現させようとしているのだ。この活動は不死不滅への憧れに起因する。私たち人間の代謝を例にとっても、老廃物を捨てつつ新しい細胞をつくりあげるといって繰り返すことによって身体の同一性を維持しているのだが、この同一性とは死すべき者が持つ不変性への憧れに他ならない。学習の反復というのも知識の同一性の維持であり、更には地位や名誉への欲求、作品創作への意欲といったものも自己の同一性を何らかの形で後世へと持続させようとする不死不滅性への憧れに由来する。不死不滅性への憧れ方は人それぞれで、肉体的に身籠っている人は美しい容姿を求め、精神的に身籠っている人は美しい魂を求めるわけだが、自らが出産する子供により美しくより不死なる性質を備えさせたいと欲求し始めた者

は、肉体的な美から精神的な美へ、魂の美、芸術の美、社会的な美、思想の美というふうに、美を不変性へ向かって上昇させていく。この上昇は如何にして行われ、最終的にはどのような美へと到達するのか。

「ここまでの話は、ソクラテスさん、あなたでも何とか付いて来れるでしょう。エロースのまだ初歩的な神秘ですからね。でもこれから先はどうでしょう。最終的な啓示へ進みますから。あなたに受け止められるか私には分かりません。でも、とにかくやってみましょう。あなたに理解してもらえるよう私も努力してみますから、あなたも絶対に集中を切らさないでくださいね」と前置きして上昇を始める。

美への道を上昇させんとする人は、指導者に見守られつつ、若いうちから一人の美しい容姿に恋をし、それについて考え始めるでしょう。次に彼は、特定の人だけに見られていた美が他の人にも見出しえることを知り、あらゆる美しい容姿に備わる美が同一なものであり単一なものであることを理解しなければなりません。「美しい容姿」という観念を全体として愛するよう自らを育て上げなくてはならないのです。つまり、ある特定の容姿に対する感情を適切な調和 (proportion) のなかで位置づけなければならないということです。次に彼は、魂の美に比べれば容姿の美など無に等しいということを悟らなければなりません。美しい魂を発見して恋をしたのなら、その相手の容姿が美しかろうと醜かろうと関係なく、美の上昇は順調に進みますから。続いて彼は美しい慣習、美しい社会システムへと目が開かれていき、物質的な美しさというのはそれほど素晴らしいものじゃなかったんだと理解していきます。ここまで来ると、彼の目は学問の方へと向けられて、様々な知の美しさが分かるようになります。(Symposium, 210-d, 趣旨)

エロースの求める美は、同一性の論理を基調にして、肉体的なものから精神的なものへ、さらに個人的精神から社会的精神、学問的精神へと高められ



る。そして、啓示はついに頂点へと達する。

このように美の地平がどんどん広がっていくことで、彼の心は、特定の人や特定の文化といった執着から自由になっていくことでしょう。そして、彼の目が転じられた瞬間 (turning his eyes), そこには美の大海原が開かれています。その瞑想的静寂のなかで彼は、最高に価値的な論理や思考へと至り、一つの種を見つけ、黄金のような哲学的実りを獲得します。その実りというのは、唯一なる知のアイデアで、次のような美の真理です。ソクラテスさん。これからの言葉にできる限り集中してくださいね。(Symposium, 210d-e, 趣旨)

そうして、いよいよ美のアイデアが語られる。

エロースの神秘に導かれ、こんな遠くまでやって来た者、美の全様相を系統的に観てきた者は、ついに最終的な啓示を呼吸しています。今のこの地点こそが、ソクラテスさん、彼が苦勞し求めていた美の魂の、神妙なるビジョンが開かれた瞬間です。それは永遠に続き、来もしないし行きもしない、開花するということもなく色あせるということもありません。というのも、かの美は、あらゆる場面で同一の美であり、いつでも今と同じく同一の美であり、ここでもあそこでも同一の美であり、あらゆる風習においても同一の美であり、いかなる信仰の人にも同一の美ですから。(Symposium, 210e-211)

美は最終的に美のアイデアへと到達する。かの美は永遠不変であり、その永遠不変性は時空間での同一性に基づいている。そうディオティーマは預言する。

ここで筆者は、美のアイデアを「対象的」に見るか「背景<sup>6</sup>的」に見るかで二通りのアイデア解釈を考える。例えば、「その美は、ここでもあそこでも同

一の美」(Such beauty is the same here as there)と説明されている部分を「ここから観てもあそこから観ても美のアイデアは同一の美」と解釈すれば、「ここ」や「あそこ」という観測地点から美のアイデアを対象的に見ていることになるが、対して「ここもあそこも美のアイデアという背景において同一の美」と解釈すれば、「ここ」や「あそこ」の背景に美のアイデアを見、このアイデア的背景(=地平、ビジョン)においては「ここ」も「あそこ」もが同一の美であるという意味になる。つまり、前者では、美のアイデアと「ここ」や「あそこ」とが別の場所にあり、後者では同じところにある。まとめると、前者の「対象的解釈」では、アイデアが事物から超越したところで実体的に存在し、美しい事物にのみ美しさを分有するが、一方、後者の「背景的解釈」では、アイデアは背景としてすべての事物(の内、底)に分有され、その背景的な美をはたらかせている、といえるということである。前者がプラトニズム的なアイデア解釈であり、後者はデューイ主義的なアイデア解釈と筆者は考えるが、その具体的考察は後に譲り、本節ではディオティーマの教説を最後まで見ることにしよう。

美のアイデアを観ている彼のビジョンは、誰かの顔とか手とか、何らかの肉体的なアイデアを捉えているのではありません。かといって言葉や知識でもなく、生き物の中や地上や天上に存在するどんなものでもなく、むしろ、永遠なる一者のもと、自分自身において自分自身によって成立している美のアイデアを観ているのです。全ての美しい事物がそれを分有(partake of it)しています。そうした事物的な美、つまり美のアイデアの部分としての美というのは、もちろん強まったり弱まったりしますが、美のアイデアそれ自体が増減するということはなく、その同一的全体が侵されるということはないのです。(Symposium, 211b)

そしてディオティーマは最後に、美のアイデアのビジョンを獲得した者がそれ以降どのような人間となりうるのか語って締めくくる。

このビジョンを獲得したならば、魅力的な人を見たときその人の徳が本物が偽物か判別できるだけじゃありません。本物の徳それ自体が当の本人を魅力的にさせているのですから。この完全なる徳を生み育てるとき、彼は神の友人と呼ばれるべきで、人間の誰かに不死の称号が与えられるとしたら、まさしく彼にこそ与えられるべきです。(Symposium, 212)

### 3. プラトニズム的イデア論へのデューイ主義的批判

こうして預言者ディオティーマの語りは終わった。はたしてソクラテスは、彼女の預言を把握できたのかどうか。それはさておき、すくなくともいわゆるプラトニズムは、彼女のイデア論を次のように理解したといえる。

イデアは永遠不変の実体であり、イデアは超自然的な必然性の世界に君臨している。対して現実世界の事物は、イデアの複製として不完全で蓋然的だから、不安定や不条理を免れえない。したがって人生の究極目的は、イデアの観想による心の平静であり、世俗的活動はそのための手段かあるいは取るに足りないものである。諸々の価値にはイデアを最高位とする絶対的なヒエラルキーがあって、肉体的（物質的）な価値よりも精神的価値の方が上位に位置している。

ガリソンは、こうしたプラトニズム的気風が二千年以上も西洋思想の底流に流れていると主張し、デューイ主義的な批判と再構築を企てていく。

まずデューイ主義は、プラトニズム的な「自然」と「超自然」との二元論を排斥する。「デューイからすれば、全ての存在によって単一なる全体が形作られており、その全体というのは、生起する出来事という継ぎ目なき織物である。このようにデューイには、超自然的な領域がないのだが、代わりに、自然の領域のうちに、未知ないし未創造の領域というのがあるのである」(Dewey and Eros, p.12)。自然と超自然との二元論に代わって、デューイは自然主義的二元論を提示する。前者の問題点は何か。後者と違い、断絶的な棲み

分けがなされてしまうところである。すなわち、超自然的世界は必然性、不変性、完全性が支配する観念世界であり、自然世界は偶然性、流動性、不完全性の渦巻く卑俗的世界というように。この絶対的な二元論にしたがって、「理論」と「実践」の分離が生じ、準じて「理論家」と「実践者」との分裂が生まれることになる。互いの交流は希薄となり、離縁となって、しまいには没交渉となる。特に問題なのは、実践側から理論側を改変できなくなるという事態である。これは至る所で悪癖をもたらししており、特にガリソンは教育現場での官僚主義的指導を取り上げる。

官僚的指導のほとんどが、クッキー生地を型抜きするような型はまり規則によってなされる。才能があるのかないか、平均より上か下か、障害者と見なすか否かといったふうに生徒をカテゴライズするというのは、我々の時代がプラトニズムから受け継いできたものである。この鋳型的論理は完全に規則通りであるため、生徒の将来にに応じて適切に対処する能力はもちろんのこと、生徒それぞれの要求を知覚する能力を閉鎖させてしまう。(Dewey and Eros, p.5)

理論は、実践と断絶したとき絶対化する。そうすると、「 $1 + 1 = 2$ 」というような純粹で完全な必然性をあらゆる知識の理想とし、実践現場からの改変要求を受け付けなくなってしまう<sup>7</sup>。

この理論と実践の断絶は、特権的な知識階級を生み出すことになる。悪しき哲人王（アイデアの観想を成し遂げたとされる人）たちの出現である。ガリソンはここでも教育現場を例に挙げ、「残念ながら、理論家と技術職とを切り離して考える見方の強い土壌では、今日でも哲人王のエリート主義が続いている。ほんの一握りの名のある人間たちが自分たちを司令塔だと捉えつつ、教師たちは自分たちの指示で動く従業員だとみなしている、ということはよくある」(Dewey and Eros, p.2) と述べている。

デューイ主義に理論と実践の断絶はありえない。「デューイにとって全て

の思考が実践的な手段－目的的思考である。それは何らかの目的や価値のために生ずる」(Dewey and Eros, p.13)。デューイにとって、理論とは実践が理論化されたもの以外にはありえず、理論は常に実践向上のための手段でしかない。そこには理論と実践のダイナミズムがある。デューイ主義は「超自然的なアイデアを請い願う代わりに、世俗的なイマジネーションをはたらかせ、既成の知識から仮説を構築し、その仮説をもとに探求を開始し、かつ継続し続ける。仮説は検査が可能であり、日々の実践で精錬されていくことだろう。イマジネーションもまたダイモーンなのである。探求は、無知である我々と到達点たる知との間を仲介する」(Dewey and Eros, p.6)。

デイオテーマによれば、エロースはたんに美を求めているのではなく、そこへ何かを生み出す（実践）ために美を求めている（理論）のだった。そこに理論と実践の断絶はない。これに準じて美の上昇においても、美のアイデアの観想それ自体が目的ではなく、美のアイデアの内に最高の徳を生み出すことが目的だったはずである。プラトニズムはこの部分を軽視し、理論と実践の断絶を招いたと筆者は考える。

続いてプラトニズムでは、「肉体的（物質的）価値より精神的価値を上位におく」という「価値のヒエラルキー」が絶対化されているといえる。前者は実践的領域に属し、後者は理論的領域に属すからである。このヒエラルキーが絶対化している世界では、諸々の価値が静的に固定されているので、価値どうしに衝突が起こらない。どちらの価値を選択すべきかはヒエラルキーに基づいてスムーズに決定がなされる。いつも常に「アイデア（永遠不変性）により近い方の価値」を優先するのが当然だ。そうすれば選択しなかった方の価値もカバーされるのだから。プラトニズムはそう主張する。

日常を反省してみればこんなことありえない。それは一目瞭然である。我々は常に損失の世界を生きている。比較できない価値どうしの狭間で悩み、一方を失うことで一方を得ている。お菓子かダイエットか。睡眠かデートか。恋愛か、勉強か。家族か、出世か。こうした二者択一を絶えず繰り返して生きている。あるいは、損失を最小限に留めようと新たな選択肢を模索してい

るのが我々の日々の実践的思考である。

日常が絶えず混乱しているのは、我々が低能だからだろうか。我々がアイデアの観想を成し遂げていない卑俗な人間だからだろうか。デューイ主義はしかし、こうした価値の混乱に価値の創造性を見出す。すなわち、プラトニズム的な「価値のヒエラルキー」に対し、デューイ主義は、いわば「価値の民主主義」を提示するのである。

デューイによると、世界の物事というのは無限に複雑である。したがって、様々なパースペクティブ（価値観、世界観）で物事は見られなければならない。パースペクティブは互いに相対的で、どのパースペクティブが絶対的に優れているとか劣っているなどということはない。各々のパースペクティブによって見えてくる価値も異なるので、個人のなかにおいても集団のなかにおいても、価値どうしの衝突は免れえない。しかし裏を返せば、そこにはコミュニケーションが成立するということでもある。

各々のパースペクティブを共有することによってのみ有限なる我々は賢くなることができる。別の立場から物事を観るということが様々なパースペクティブを掛け合わせていくことになるわけだから。そういうわけで、デューイは異なるもの同士の対話こそ成長欲求の本質であると考えた。単一なる観点が他を除外するとき、結果として現実が歪められる。一元主義はドグマである。(Dewey and Eros, p.15)

プラトニズムは一元主義であり、デューイ主義は多元主義である。アイデアを頂点として価値が静的に固定された世界。そこに新たな対話は成立せず、新たな価値創造もない。つまり、一元主義として閉じられた体系に成長ということはないのである。自らのドグマを批判できる観点が外から入ってこないのだから。

ディオティーマの教説に戻って筆者なりに考えてみると、美の上昇（というパースペクティブ）において彼女がプラトニズム的ヒエラルキーを採用して

いることは間違いない。しかし、絶対化したかどうかは議論の余地がある。視点が回転 (turning eyes) して美のアイデアの観想を成し遂げたあと、価値のヒエラルキーが絶対的な価値基準として存続するのだろうか。そこは語られていない。デューイ主義的に相対化される可能性は十分に考えられるだろう。

デューイ主義の実践的思考は、プラトニズム的な観想的思考と違い、「悩む」ということを免除しないといえる。この場合の「悩む」とは、既成の価値選択の狭間で悩むということもあるが、むしろ選択肢そのものを創造 (ポイエシス) するはたらきを意味する。例えば、「お菓子」か「ダイエット」かではなく、新たに「エクササイズ」という選択肢を思い付いたとき、当人の価値体系には新しい価値の創造が生じている。彼 (彼女) の中では、いわば新しいアイデアが誕生している。つまり、新しい価値は「新しい」ゆえにプラトニズム的な実体的アイデアを越えていると考えられる。

アイデアを実体的に捉えるならば、「アイデアは永遠であるから、制作者は創造することができず、ただ再創造するのみである。アイデアに従って再創造するのみである」(Dewey and Eros, p.25)。アイデアを観想したとき、価値のすべてがそこにあるのであって、その他に新たな価値が創造されることは理論上ありえない。

デューイ主義はアイデア (Idea) を理想 (ideal) に変換する。「理想とは、欲求されている可能性である。それは価値であり、あるいはデューイがより好んでいる言い方では、実践的に「見出された目的」(ends-in-view) である」(Dewey and Eros, p.21)。この「理想」という価値は、実体的アイデアと違って成長 (進化) する。

まず、理想はイマジネーションのなかで浮かび上がる。しかし、いざ実践に移そうとすると環境 (社会規範や物理条件など) から阻害を受ける。このとき探求 (inquiry) がはじまる。「探求は困窮状態を欲求可能性へと改変する」(Dewey and Eros, p.22)。つまり、理想は探求的活動を媒介にして環境条件を道具化しつつ、自らも欲求可能な理想へと変更 (成長、進化) させることで、新しい価値を現実へと呼び出すのである。例えば、鳥みたいに空飛ぶことを夢

見た人類が飛行機によって理想を実現させたように。これがデューイ主義の見るポイエーシスの実態であり、その一連のプロセスが「はじめに」で見たプロネーシスとしての実践知である。デューイ主義は、自然と超自然との二元論ではなく、「現実と理想との自然主義的弁証法」(Dewey and Eros, p.22)によって価値を捉えるのである。この弁証法においては、理想と現実との相互作用によって両者とも更新を強いられる。理想はより現実的な理論を生み出し、現実理想的な実践へと近づく。そうした両者の共同作業のなかで新しい価値が創造されていく。デューイ主義においては、理想(ないし理念)も実践と同じく動的に捉えられるのである。理念は外部を取り入れて拡大し、より具体的な自己(=価値)へと成長していく。

一方プラトニズムは、新しい価値を創造しない。あるいは創造する勇気がないともいえるだろう。そもそもプラトニストたちが超自然的な必然性の世界を構築しようとするのはなぜか。失敗や無駄や不条理から脱し、想定内の出来事しか起こらない生活に安住したいためである。対して価値創造というのは、偶然も多大に影響し、失敗や無駄や苦悩といった悲劇が付き物である。プラトニストたちは自分のアイデア世界が傷つくことを恐れるゆえ、新しい価値の創造へと踏み出さない。あるいは創造するということすら思いもよらないかもしれない。彼らはアイデアを愛する(love)のみでそれを欲しようとは思わないからである。欲する(desire)ということは煩悩からの執着を離れていないということだから、むしろ彼らは軽蔑するだろう。愛を欲望へと発展させない彼らの思考は、行動に結びつかず、まして創造などない。

対して価値を欲する人間は、創造の道を歩き出す。煩悩への執着を勇氣に変えて。ただそこでは、予想だになかった失敗や苦難がやって来る。デューイ主義はしかし、loss(失敗、損失、障害)にこそ積極的な価値を見出す。ガリソンは言う。

lossは我々の有機的な営み、その全体性や健康を阻害する。しかし、自分の外部に存在する多くの物事や人々を発見させ、調和的な在り方と



いうのが未だ内に留まった状態であることを教えてくれる。loss は、これまで無意識だった自分に足りない部分 (need) を意識化させてくれる。(中略) 不足な生活 (the losses life) に対してよく反省し、探求を怠らない人たちは更に賢明な人へと成長するだろう。loss は人を傷付ける。だが反面、成長させまいとしていた縄から我々を解放させるのだ。エロースが成長しようとするとき、必ず改変 (pruning 剪定) を強いられる。でもそのとき、我々は自分自身と他の存在とを発見するのだ。そのときこそ、大地や太陽光に向かって新しい根や枝を伸ばさなければならない。(Dewey and Eros, p.19)

つまり、lossこそエロースを成長させる教師なのである。エロースは、自らを愛から欲望へと発展させるとき lossに出会う。そこではじめて世界を知り自分を知る。そのとき臆して愛へと逆戻りせず、創造の道を進み続けようとするなら、エロースは探求をはじめめる。探求を通して自分と環境とを改変させようとする。挑戦 (実験) を開始する。エロースは賢くなろうとする<sup>8</sup>。更にガリソンは言う。

トラブルの状況において、その混乱を調和へと回復させる道がないか、価値の可能性に関する数々のアイデア (ないしは仮説) が当事者にイメージできるとき、彼の漠然とした不調和の気分が自らの欲求を鮮明にさせていく。彼のなかである見通しが立ったなら、その欲求を満足させる手段が模索され、現状のコンテキストのあらゆる様相が注視されていく。デューイは、実践的思考なるものを、苦痛な困窮状況をより欲求可能なものへと創造的に改変する art (技術, 芸術) として捉えた。欠損と回復のリズムこそ自己拡大としての成長、発生、生成のサイクルである。(Dewey and Eros, p.16)

欲求と現状とが分離した状況において、エロースは両者を凝視しはじめめる。

本当のところ自分は何を求めている、現状をどう変えたいと考えているのか。そのためには何が必要か、何が足りないのか、何が利用できるのか。あの人の意見も聞いてみようか。よし、ここは上手くいった。くそ、あそこが上手くいかない。じゃあ次は何を試してみるか……。こうした調和の破れと回復のなかで、artとしての実践的思考（プロネーシス、実践知）が生きてはたらいっている。

調和の回復といっても、それは以前と同じ調和ではない。新しい欲求と新しい環境と新しい価値によって、新しい調和が獲得されていくのである。欠損と回復のリズム。それはサイクルというより成長のスパイラルだろう。このスパイラルは、自然が本来的に備えているはたらきである。ガリソンも「自然な探求が生命のリズムを刻んでいる」(*Dewey and Eros*, p.16)と言っている。

#### おわりに——静的調和から動的調和へ

本稿ではここまで、ガリソンの論文を手引きに『饗宴』を考察し、特に前節ではプラトニズムをデューイ主義的に批判したのだが、そこで見えてきたことは、プラトニズムが静的な思想で形作られているのに対し、デューイ主義は動的な思想に彩られているということである。この両者の違いはどこに由来するのか。それは、究極的なものを「実体」として見るのか、「背景」として見るのかの違いにあると筆者には思われる。

先に筆者は、アイデアを「事物がそれを背景に存在しているところのもの」として解釈できる可能性について述べた。アイデアの「背景的解釈」と呼んだものである。

アイデアを背景として見たとき、次のようなデューイの背景 (background) 概念と重なってくる。

いかなる経験でも、もっとも卑近なものでさえ、無限定で全体的な場 (an indefinite total setting) というのを持っている。どんな事物でも物事でも、

無限に広がっている全体性のいま・ここという焦点でしかない。この全体性とは、質的な「背景」である。この背景が限定され、それによって個々の物事が限定的に意識化され、はたまた性質や特性が条件付けられるのである。直観という言葉は神秘的な何かを連想させるけれども、かの無限なる包囲 (the unlimited envelope) への感覚や気分が活性化するのに応じて、いかなる経験でも神秘的になる。芸術作品での経験がそうである。

(*Art as Experience*, p.193)

地球や銀河などはもとより、我々が想像しうるどんなに巨大な物体、長遠な時間でさえも極小の一点にしてしまうような無限の包括的背景が、自らを限定することにより、我々の経験するすべての事象を成立させているとデューイは言う。この無限の包括的背景は「無限定な広がり」の背後にある、イマジネーションが宇宙 (the universe) と呼ぶもの」とか「どんなに個物化されてもお同一性を維持する広大な性質」などとも呼ばれ、あるいは「この世界の背後にある世界。にもかかわらずそこは、この世界よりも深い実在性であり、そこに包まれて我々があり、そこに包まれた日常の経験のなかで我々は暮らしている。我々は我々の背景へ投げ出されてこそ我々自身を発見する」とか「この全体性が結果するところ、祝祭的気分があり、未来があり、予感やひらめきがある」といった謎めく説明がされており、極論として「この全体性に付けるべき名前がない」としている (*Art as Experience*, p.194-195)。ここまできると、ディオティーマの語るアイデアとデューイの背景概念とが極めて形而上学的な神秘で共鳴し合っているのが感じられるが、そのときの形而上学はプラトニズム的な超自然的形而上学ではありえないだろう。いわばそれは「自然主義的で動的な形而上学」となり、究極的なものが実体ではなく「背景 (ないし場)」として見られるはずであるが、更なる考察は今後の研究課題としたい<sup>9</sup>。

アイデアが実体化されたプラトニズム的世界は、アイデアを頂点にして全てが整然としている。もし実現されるのなら、この静的な調和はある種の「美しさ」

かもしれない。神的で完全かもしれない。不幸や災難は起こらないのかもしれない。でも退屈で面白くない調和だ。そう筆者には思われる。そこに生きた時間は流れない。いわば将棋盤の上で全ての駒が初期配置のまま動かないように。静的調和への憧れは我々を夢想へと誘惑するだろう。「風が止んで花の香りがし始めると、体中の血が静かになり、我々は眠りへ誘われます」とアガトンが比喩したエロースのはたらきのように。

対してディオティーマのエロースは我々の意識を目覚めさせる。自分の欠点、弱点、不完全さを見せつけてくる。この世界が美しくないものだらけなことに気付かせる。そんな不足の世界で戦う人間は、本人にしてみれば大変なのだが、体中に生き生きとした「魅力」(人間的な美、人間味)を充満させているだろう。彼(彼女)が生きている時間には、良くも悪くもドラマがあるだろう。笑いやため息や涙や叫び声が絶えないだろう。そうした彼(彼女)の魅力を成立させているのは何か。その半分を担っているのは、彼(彼女)の欠点や失敗、環境の不運や悪条件といった「美しくないもの」(醜)である。つまり、美と醜との真剣な攻防戦が、全体としての動的な美(=魅力)を成立させているといえるのである。「部屋が綺麗になっていく」という魅力の成立には、「散らかっている事物」や「汚れ」も一躍を担っている。つまり、背景としての美のアイデアから見れば、部屋の掃除に関する醜い因子も動的な美として生きてはたらいっている。美と醜との中間的移行そのものに動的な調和が現れている、といえるのである。いわばそれは、動的であるがゆえに「調和と不調和との調和」といわざるをえない。デューイの背景概念(あるいは背景としてのアイデア)にはこのような動的調和が流れているように筆者には感じられる。

デューイは、芸術による感動(カタルシス)こそ先の包括的背景に触れた瞬間であるとし、それは自己拡大の感覚だと述べ、こう締めくくっている。

そこでは、エゴイズムが存在と価値の物差しでなくなっている。我々は、我々の背後にある無量世界(vast world)の市民となっている。自分

は無量世界の内側で生きていて、それとともに存在しているんだ。そういう生き生きした自覚が、「この世界の中で一緒に暮らしている我々たち自身」という一体感を、そんな奇跡のような満足をもたらしてくれる。

(*Art as Experience*, p.195)

動的調和という無量なる背景に常に永遠に祝福されつつも、人生の舞台上では絶えず悪戦苦闘し続けていく、というのがエロースとしての人類の劇ではないか。デューイの言葉は、そういう預言に筆者には聞こえる。

#### 文献

- ・ Plato, Symposium, Translated by W. R. M. Lamb, *Plato III: Lysis, Symposium, Gorgias*, Harvard University Press, 1925.
- ・ John Dewey, *Art as Experience*, Minton, Balch & Company, 1943.
- ・ Plato, Symposium, Translated by Michael Joyce, *Plato: The Collected Dialogues including the Letters*, Princeton University Press, 1961.
- ・ Plato, Symposium, Translated by Tom Griff, *Plato: Symposium and Phaedrus*, Everyman's Publishers plc, 2000.
- ・ Jim Garrison, *Dewey and Eros: Wisdom and Desire in the Art of Teaching*, Information Age Publishing, 2010.
- ・ プラトン『饗宴』, 久保勉訳, 岩波文庫, 1952.
- ・ プラトン『饗宴』, 鈴木照雄訳, 『世界の名著 プラトン I』, 中央公論社, 1966.
- ・ 藤沢令夫『プラトンの哲学』, 岩波新書, 1998.
- ・ 藤沢令夫『イデアと世界——哲学の基本問題』, 『藤沢令夫著作集 第二巻』, 岩波書店, 2000.

\*引用中の訳は下蘭。ただし『饗宴』はJoyce 訳から訳した。

- 1 教育哲学の研究者。バージニア工科大学に教授として勤務。専門はデューイ (John Dewey, 1859-1952)。米デューイ協会の元会長。本学とも親交があり、本学の名誉教授称号を受けている。創立者との対談も発行されている。
- 2 プラトン哲学とプラトニズムの区別が厳密にできると筆者も考えていない。実際

にはプラトンの著作自体にプラトニズムの悪しき側面が色濃く現れているとみられる箇所があり、そこにおいてはプラトンの記した文面そのものが批判の対象となる。具体的には、彼の哲人王思想（アイデアを観想できる哲学者だけが政治の特権的に執り行うという社会システム）への批判が考えられるが、その思想が根本的に間違っているというよりも、手段として、民主主義を理念とする現代社会にそぐわないという意味で批判される、と筆者は考えている。コミュニケーション技術の発達した現代世界では、民衆それ自身が全体として哲人王となり、政治的に自律することが望まれるから。こうした哲人王思想に比べてアイデア論においては、プラトン哲学とプラトニズムとの区別はかなり明確にできると筆者は考え、それが本稿の主眼でもある。ちなみにガリソンの論文では、「プラトン」もプラトニズムの意味で使用されている。

- 3 ガリソンも「満足な食事、心の交流を望まない人間はいない。そうした意味で饗宴というのは強力なメタファーだ」(*Dewey and Eros*, p.19)と述べているが、この言葉を受け、筆者には『饗宴』という作品そのものの内に全体としてプロネーシスが生きてはたらいっているように思われる。『饗宴』中の誰のエロース論が正しいかというよりも、議論の展開そのものがプロネーシスの自己発展的な在り方を示しているのではないか。そういう観点に立てば、『饗宴』の中心人物ディオティーマがそのままプラトン哲学の体現者ではなく、その一つの現れ（もちろん、主要な現れではあるが）として相対化されるだろう。
- 4 例えば流体力学において、物体が自由落下していくときの様々な動きというもの、物体の質量や形状が水や空気という物理環境に創出（ポイエーシス）した作品として見るができる。
- 5 プラトン学者の藤沢令夫は「アイデア（論）」という言い方に対して「この呼称が定着した恰好になっているのはアリストテレスによるもので、プラトン自身に由来するものではない。つとめて専門用語の固定化を避けるプラトンは、（例えば）「〈美〉そのもの」「まさに〈美〉であるもの」などを「イデアー」「エイドス」と呼ぶことも多いが、他の呼び方——「実在」「実有」（ウーシアー）、「本性」（ピュシス）、「あるもの」（ト・オン、タ・オンタ）、「真実」「真実在」（アレーティア、タ・アレーター）等々——を用いることもそれ以上に多い」（『プラトンの哲学』, p.86）と紹介している。つまり、プラトン哲学が語るアイデアは、本来、プラトニズム的に固定化して定義できるものではなく、極めて動的な意味合いを持っていたと考えられる。
- 6 デューイの背景（background）概念との関連からこのように名付けた。詳細は本稿の「おわりに」を参照。
- 7 無論、数学に代表されるような純粹論理が無用と言っているわけではない。その論理的必然性が現実世界のコンテクストから逸脱し、あらゆる実践的思考に適用されることを問題視しているのである。筆者が思うに、例えば、ある問題を科学的に対処するため（ないしはある現象を説明するため）、その仮説構築の際に数学的論

理は不可欠である。反面、何かの作業をする場合、一人より二人の方が常に倍の効率になる（「 $1 + 1 = 2$ 」）かということそんなことはなく、どういう状況のどんな作業なのか、二人はその作業が得意なのか不得意なのか、二人はどんな関係か、相性は良いか、といったコンテキストの違いに応じて効率は全く違うのである。

- 8 ここで言及しておきたいことは、lossに臆しなかった全てのエロースが賢く成長する訳ではないということである。lossによって自らを顧みず、自己改変を拒絶し、欲望の赴くままエネルギーを「発散」させる場合、そこには破滅が待っている。その典型が暴力的行為である。探求によって自己改変に成功したエロースのみが欲望のエネルギーを「表現」することができ、創造の道が開かれる。つまり、エロースの成長には欲望だけでなく技術（訓練、教育）が必要ということである。この、発散を表現へ改変させることをデューイは欲望の「間接化」と呼ぶ。間接化については別稿を設けたい。
- 9 ここで藤沢令夫の指摘だけ紹介しておきたい。彼は、プラトンが後期諸著作において事物の実体性を排斥し、アイデアと場（コーラー）との関係で現象世界を説明していると述べており、「<sup>レ</sup>水。なら <sup>レ</sup>水。として現われるものは、実際には <sup>レ</sup>水。という（実体的な）物ではなく、〈水〉のアイデアの似像を受け入れた〈場〉の部分であり、(中略) その他同様に、そうした似像が〈場〉のうちに入る（うつし出される）のに応じて、それぞれのものとして現われるというのが、この現象の世界（自然界）のありようなのである。」「(アイデアと世界」, p.143)と言っている。このプラトンの「場」とデューイの「背景」との親近性は興味深い。